末黒野

すぐろの

5月号（通巻813号）

深雪

小川玉泉

塔包む雪に舞ふ音なかりけり

戸を鳴らし湘南の地を包む雪

雪激しバレンタインの日なりけり

灯を奪ひ雨戸を鳴らす雪の精

停電や雪国の憂さ思ひをり

外灯の消えては点り雪止まず

雨戸打つ風雪日付変りけり

丁字路の深雪を映し道路鏡

コーヒーや深雪の憂さを忘れをり

週末の朝森閑と深雪晴

シクラメン廊下に充つる雪後の日

雪解けの歩道にまたぐ鷗の絵

梅匂ふ

松本三千夫

降りみ降らずみ立春の雪となる
海よりも春の光や野に満つる
冴返る野の道往くも街行くも
力抜く一枝もあらず梅匂ふ
梅の山すとんと切れて基地の海
白梅や日蓮像の眉きりり
紅梅や石に彫られて墓
牡丹の芽鎌倉五山第一位
薔薇の芽や文学館の石の裸婦
上牢の太き格子や春寒く
天皇の散策の浜干若布
六畳の仏間即居間春障子

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

白梅

大橋伊佐子

気負ひなく生き来し幸や福寿草
加齢とは空し寒紅させばなほ
行きすぎて気づく薄暮の冬桜
亡き夫の夢に覚めけり雪の夜
鬼やらひ終へし星空美しき
界隈に日の丸はなし建国日
如月の風の育てし湖の藍
仏壇にバレンタインのチョコ一つ
白梅の暮色に青さ加へをり
礁呑み礁吐き出し春の潮

蒼鷹

黒滝志麻子

みどり児の身丈に適ふ宝舟
円墳の裾の崩れや冬すみれ
落日の燃え立つ峡や蒼鷹（もろがえり）
大寒の和紙干し上がり茜空
茶屋の灯にしばし憩ひぬ雪催
風音の渡る野面や梅探る
春雪やからくり時計刻を告げ
朝東風や蔵の奥より酢の匂ひ
ものの芽の放つひかりや風集ふ
明け初めし空のひろごり梅の花

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

凍ゆるむ　加藤静江

寒風の漁港漁なく鳶舞へり
逆光の海の眩しき寒土用
まなかひに江の島坐する冬落暉
鳴り止まぬ寺の風鐸きたおろし
山稜の丸味を帯びぬ凍ゆるむ
人声の絶えたる夕べ雪催
いつも来る豆腐屋のゐて日脚伸ぶ

浜どんど　菅野日出子

富士のぞむ高階に酌む女正月
臘梅を活けて客待つ湯葉の店
くづほれしよりの火勢やどんど焼
消防士の囲むどんどや爆ぜる音
浜どんど旋回の鳶遠巻に
真鍮の方位計凍む峠道
山茶花や昼は無人の両隣

雪

菅野蒔子

吹き込みし雪や隙間のありどころ
あつぎせよ風邪は怖いと子のメール
町や村隔てなく雪降りに降る
日の渡る厚き雪被し家並かな
屋根の雪落ちて静寂のなほ深む
共に雪掻く全盲の隣人も
鬼打ちし豆に鴉の来る朝

門松

堺昌子

女手に門松を立て終りけり
初夢の妣とをるごと醒めてなほ
起き抜けの喉をさ走る寒の水
まち針の色さまざまや春隣
石庭の園児等の声春近し
引き潮にあらはるる島浜千鳥
寒林の黙を破りぬ冬の百舌

雪の朝

西川みほ

濡れづめの柄杓に木の香初詣
冬の鵙連れ鳴きしげき寺領かな
亡き夫のすべるなに覚め雪の朝
ビル風に舞ふ雪の呑む鴉かな
寒暖に暮しの狂ふ春立ちぬ
潜きても翔ちても二羽の残り鴨
沖からの風筋著し黄水仙

鬼やらひ

森清堯

百態の骨格模型枯木立
身の丈の黒塀越えて実南天
白鳥の胸のひろぐる水鏡
身の箍の締まり寒九の水を飲む
下校子の話題はゲーム花八手
鳶の輪へ灰上げ浜の吉書揚
逸りたるキューバの太鼓鬼やらひ

青炎集

小川玉泉選

横浜　中野久雄

人垣の大道芸や日脚伸ぶ
起き抜けの胃の腑に沁むる寒の水
山畑の鍬寄せつけず凍てけり
鳥たちのさざめく塒寒落暉
大釜の滾つ古民家梅香る
昼暗き土蔵に潜む余寒かな

横浜　山崎稔子

寒晴れの沖の白帆や鳶の笛
浮子からむ漁網の乾き寒土用
薄月の残る中天息白し
一日に一句のならず葛湯ふく
旅立ちの子の無事祈り冬木の芽
晴れやかや一人櫓をこぐ雪見舟

横浜　有賀鈴乃

青竹の太き手摺や初詣
獅子舞へ帽子をとりて噛ませけり
浜小屋の俄づくりや牡蠣を焼く
頂きのだるまの転びどんど果つ
桟敷より幼子目ざし年の豆
暁の庭ひと色や春の雪

横浜　芝田幸惠

薄氷や予告編なき世を生きて
雪激し朝より煮込むカレーの香
雪の坂ペンギンの歩となりにけり
雪浴びて山山ぐつと近づきぬ
軒低き家の日の丸梅花節
春待ちて鳩の取付く護岸壁

横浜　中山良子

日和得て薔薇植ゑ変ふる寒最中
冬草の畦を緑に日のゆたか
海見ゆる湯宿や庭の梅芽ぐむ
姿よき枝を一つに松の雪
真昼とも紛ふ深夜の雪あかり
風に舞ふ枝の春雪朝茜

横浜　上月智子

宅配便の包み簡素や隙間風
釣具屋の障子を覆ふ魚拓かな
きじ鳩の足音の幽か霜の朝
人日の谷へ響けり槌の音
投函口元に戻りぬ小正月
探梅や傘を閉ぢたり展げたり

横浜　原和三

冬の霧海賊船のぬつと現る
長寿願ひ終のリフォーム水仙花
寒晴や足音澄める切通し
寒風や棚田の土のくろ黒と
寒林の残照浴ぶるわれ一人
寒林やほぐれきつたるわだかまり

横浜　橋場美篤

朝市の三浦大根の白さかな
半島の夕日を抱き大根畑
鈍色の海凍空の鳶の笛
焼き牡蠣の大きく爆ぜて潮の香
さよならと手を振る広場梅の花
とつぜんの停電の街雪あかり

横浜　嵐弥生

公園の工事重機の音冴ゆる
寒満月詩心生るる句座帰り
鬼やらふ声の憚る時世かな
福豆や今年も端折る年の数
硬き風ゆるぶことなく春立ちぬ
咲き初めし梅に饒舌雀たち

横浜　庵原敏典

餅花や飛驒の山家の土間昏き
動画いま静止画となり凍つる滝
枯菊の匂ひかすかや久女の忌
三百年てふ椨の木や寒の明け
うぐひすやむかし宿場の連子窓
人語なき寺苑にぬれて迎春花

耕土集

横浜　大霜　朔朗

馬小屋の敷き藁新た初時雨
郷土誌を読み耽る夜雪しまき
成人の日華やぎ運ぶ路線バス
早朝の土手を走る子頬被
大寒や返す堆肥の湯気を浴び

西東京　石井　雲雀

雪掻くや身幅の道をポストまで
雪国となりて我が街眠りけり
大かまの鰤の煮つけや一人膳
春雪の膝まで沈む一歩かな
春北風寝床の中のソチ五輪

横浜　佐々木永子

押入れの奥に余寒のひそみけり
地下道に響く靴音冴返る
打ち返すボール軽やか草萌ゆる
裸木の梢くれなゐ浅き春
まづ香りここにもありぬ梅の花

松本三千夫選

吉田美智子

小夜ふけて豆撒く声や闇に消ゆ
立春の軸に一筋日のほのか
立春の和食の要御御御付
齢取らぬ雛と語る傘寿かな
風を蹴りふらここの空白き富士

横須賀　齊藤　眉山

こがるるを知らぬ少女や草青む
二月はや木椅子に忘る花鋏
風二月灯台の辺のしらじらし
牡丹雪おのづからなる里ごころ
臘梅の離れても香の身ほとりに

横浜　土屋　実郎

この雪も孫へ合格祝ひなる
煮凝りに注文多き兄なりし
寒明けや召し捕られたる白鼻心
春立つや一口で喰ふ目玉焼
飯蛸の何拗ねてゐる砂の上